

# はるの変異

尾世川 正明

二つ折りの

しろい紙に墨をにじませていると

ロールシャツハテストのように

山や溪流や岩肌がみえ

小さな庵に住む小さな人もみえてくる

今朝はまどから

名も知らぬ小鳥の声が聞こえる

この頃この町に変な野鳥が多くなったと

散歩で逢った老人が話していたが

かれの認知機能は

以前のように正常なままなのだろうか

とはいっても

すでにわたし自身も鏡に映れば

影がゆがんでどこか妖しい

ちいさな鉢で

多肉植物をめでているわたしは

ホモサピエンスのオスとして

すでに生殖機能を失っているのだろうか

さりとして心にはまだまだ春が映りこみ

なまめいて艶なるものを求めている

しろい二の腕のようなもの

長く伸びた指のようなもの

その先の白く飾られた爪

爪に触れる膨らみはじめた桜のつぼみ

肉という言葉の響きになどは

少しくしろめたくて使えず

そのくせ

厚い唇のような葉の

ほんのりとした桑の実いろにみとれ

すこし触れてみたくなる

はるなのに

甘みをおさえた桜餅ではなく

焼いた厚い牛肉を食べている

茶室で抹茶を飲むのではなく

ペットボトルから硬水を飲んでいる

それなのに体の芯では

多くの骨たちが水気を失い

少しずつ鉋物に代わってきているので

やがて肩や胸から針のように骨が突き出してくる

そんな恐怖を夢想している

大きな墨滴が紙に落ちて暗黒星雲になった

星雲がさらにかたちを変えて黒い異形になった

私が変わってゆく姿

結局わたしの命とはこんなものかもしれない

そんなことを昨日からしつこく考えている

この脳も少し変異したらしい